風の名前はジャーゴンなのか?

What's in a name?

福島(ふくしま) あずさ　神戸学院大学講師

大学で講義をしていると、学生が眠りに落ちる瞬間を目にすることがある。そんなときは、使っていることばが難しかったり、説明が足らなかったかもしれない、と自省する。学生たちは初めて聞く内容を理解しようと努めているが、こちらが知らないことばを並べ立てれば、つい眠気におそわれても仕方がない、と。

こう考えるようになったのは、短期留学先のアメリカで「ジャーゴン（専門用語、身内言葉）はできるだけ使わないように」と注意を受けたためである。当時筆者は大学院生。早く世界中の研究者とカッコよく議論できるようになりたいと思っていた。しかしその指摘によって、自分の使うことばがあくまで、同業者のあいだでしか通じない「業界用語」であることに気がついた。

昨年執筆した『窓から見える世界の風』（創元社）では、世界各地で名付けられた五〇の風を、その特徴やそれにまつわるエピソードなどとあわせて紹介した。しかしじつは、紹介した風の名前の多くが、アメリカ気象学会の用語集に掲載されているジャーゴンでもある。そもそも、専門家向けの用語集になぜ各地の風の名があるのか。

「おろし（日本）」、「フェーン（アルプス）」、「シロッコ（地中海沿岸）」などの風のよび名は、古くから人びとのあいだで使われてきた。アルプスのフェーンという風は、春先に決まって急な気温の上昇を伴って吹くため、住民たちのあいだでは、雪解けと作物の植え付けを始める合図だったという。二〇世紀初頭に、研究者たちがその風のメカニズムを研究した結果、山を越えて吹く風が風下側で温度上昇をもたらす現象として、気象学の理論のひとつとなった。今日その現象は、世界中の人びとに「フェーン（現象）」とよばれている。つまり「フェーン」は、一部の地域の人びとが語り継いできた風の名が、学問によって、別の意味をもつジャーゴンに変わってしまったことば、といえる。

一方、すべての風の名前が重要なジャーゴンとなるわけではない。日本各地の「おろし」や「だし」といった風は、「山越え気流」や「地峡風」など、メカニズムをあらわすことばによって説明され、残念ながら世界の「オロシ」、「ダシ」とはなっていない。各地にはまだメカニズムが十分明らかになっていない風があるので、将来的にあらたな現象が発見され、その風の名が重要なジャーゴンとなる可能性は十分にある。用語集に多くの風の名が収録されているのはそのためだろう。研究者としては、そんな「業界」のニュースの動向に期待が高まる。一方、学生たちからすると、すでに人びとの手を離れてしまったことばが並ぶ講義は、あくまで日常とかけ離れた世界としか感じられないに違いない。